

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐつて (その二)

田 中 康 二

〈要旨〉 昭和二十年八月、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦した。敗戦後の日本がたどったのは茨の道であった。敗戦国としての日本は、戦勝国によって主権を取り上げられ、土地を取り上げられ、誇りを取り上げられた。とりわけ、言葉を取り上げられたことは痛恨の極みであった。失われた言葉は二度と戻ってこなかった。戦後の日本の歩みを考えると、言葉狩りはポディーブローのように効いてきた。連合国軍総司令官によって発令された「神道指令」において、公文書での使用禁止を明記されたものは「大東亜戦争」と「八紘一字」だけであるが、消し去られた言葉はほかにもあった。「日本精神」もその一つである。

「日本精神」は数度の対外戦争を経て誕生し、満洲事変を境にして流行し、敗戦とともに消滅した用語である。それは幕末期に「大和魂」や「大和心」と呼ばれたものが装いを変えて、昭和の時代に現れた精神であった。そこには、宣長の詠んだ數島の歌の誤読に基づいた曲解という問題が横たわっている。また、「日本精神」が一般化するに際して、

辞書や教科書の影響を抜きに語ることはできない。辞書は最先端の研究を広く一般人に伝えるためのものであり、教科書は通常、学術や論壇の影響が即座には及びにくいと考えられるが、この時期は時局の影響が直接反映されることもあった。それゆえ、辞書や教科書の記述は時代の空気をまともに受けて、時局に翻弄されたのである。

以上の検討により、「日本精神」が誕生し、流行し、流布した後には、忽然と姿を消す経緯を明らかにする。

〈キーワード〉日本精神論・敗戦・本居宣長・国学・誤読と曲解

一、問題の所在

昭和二十年八月、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦した。敗戦後の日本がたどったのは茨の道であった。敗戦国としての日本は、戦勝国によって主権を取り上げられ、土地を取り上げられ、誇りを取り上げられた。とりわけ、言葉を取り上げられたことは痛恨の極みであった。失われた言葉は二度と戻ってこなかった。戦後の日本の歩みを考えると、言葉狩りはポデイーブローのように効いてきた。連合国軍総司令官によって発令された「神道指令」において、公文書での使用禁止を明記されたものは「大東亜戦争」と「八紘一宇」だけであるが、消し去られた言葉はほかにもあった(注1)。

「日本精神」もその一つである。

次節以降で見えるように、「日本精神」は数度の対外戦争を経て誕生し、満洲事変を境にして流行し、敗戦とともに消滅した用語である(注2)。それは幕末期に「大和魂」や「大和心」と呼ばれたものが装いを変えて、昭和の時代に現れた精神であった。そこには、宣長の詠んだ敷島の歌の誤読に基づいた曲解という問題が横たわっている。また、「日本精神」が一般化するに際して、辞書や教科書の影響を抜きに語ることはできない。辞書は最先端の研究を広く一般人に

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

伝えるためのものであり、教科書は通常、学術や論壇の影響が即座には及びにくいと考えられるが、この時期は時局の影響が直接反映されることもあった。それゆえ、辞書や教科書の記述は時代の空気をまともに受けて、時局に翻弄されたのである。

以上の問題意識に基づいて、本稿では「日本精神」なる語が生まれ、戦時下の日本で定着し、敗戦とともに忘却されていく過程について、教育という観点から中学修身教科書を基軸として考察していきたい。

二、本居宣長と「日本精神」

本居宣長と「日本精神」にはいかなる関係があるのか。本居宣長が没したのは享和元年（一八〇一）、「日本精神」なる言葉が出現したのは、いくらか早く見積もっても明治末年（一九一二）頃である。その間、百年以上の隔りがある。したがって、本居宣長と「日本精神」の間には一切関係がない。

たしかに厳密に言えば、宣長が「日本精神」を高唱したことはありえない。だが、事はそう単純ではない。人は歴史をさかのぼってルーツを見つけることもあり、書物を繕いて先蹤を見出すこともある。事ほど左様に、不可遡及の禁を犯すものである。「日本精神」が流行した時、宣長が詠んだ「敷島の歌」が新たな装いで甦った。

そもそも、敷島の歌は、宣長が還暦（六十一歳）を迎えた時に描いた自画像に添えられた歌である。寛政二年秋のことである。次のようなものである。

これは宣長六十一寛政の二とせと

いふ年の秋八月に手づからうつし

たるおのが、たなり

筆のついでに

しき嶋のやまとこゝろを人とは

朝日に、ほふ山さくら花

この自画自讃は宣長にとつて非常に重要なものとなり、没後に歌会を催す時には掲げるように指示を出しているほどである（遺言書）。この歌は宣長自身が終生愛した新古今集所収の歌「朝日影匂へる山の桜花つれなく消えぬ雪かぞ見る」（春上・九八・藤原有家）を本歌としている。有家歌は春先の桜花を残雪に見立てる趣向の歌である。敷島の歌はこの歌の上句を下句に配置したものである。言うところは、「大和心」とは何かと尋ねられたら、それは朝日を浴びて咲き匂う山桜の花のようなものであると答えよう、といったところだろう。では、大和心とは何なのか。興味深いのは、それを宣長は「朝日に匂ふ山桜花」という比喩で表現しているということである。「大和心」という抽象概念を「山桜花」という具体的景物に見立てているわけである。大和心とは、一般に日本人の持つ素直で純粹な真心の意で用いられる。だが、大和心は特定の意味を持つものではなく、宣長自身も歌に詠んだように、「朝日に匂ふ山桜花」に譬えなければ表現できないものだったのである。このことは銘記しておく必要がある。

近代になって、敷島の歌は宣長の門弟筋だけでなく、広く一般にも知られるようになった。そして、有名になると引き替えに異なる文脈で理解されるようになったのである。一つ目は武士道精神であり、二つ目は「散る桜」の説であり、三つ目は日本精神論である。

まず一つ目として、宣長が自画自讃として詠んだ歌がどうして武士道精神と関わるようになったのか。すでにその先蹤は西周の文章に見出すことができる。『兵家德行』其三（明治十一年）の中に日本人の性格を論じたくだりがあり、次のような叙述がある（注3）。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

然るに流石に国学の大先生ほどありて、

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山桜花

と詠ぜられたるこそ本邦人性習の印記なるべけれ。此歌の本意などは余が此場に臨みて論ずる所に非ざれども、之を性質上の字義に換へたらば忠良易直とも言ふべきか。夫れ単弁の桜花は牡丹の艶麗蓮花の清潔なるに如かず、又椿や木槿の如く腐敗するまで枝上に残るに非ず、又観るに足らざる棗か袖の如くにも非ざるが如く、人も質直は善しと雖ども樸魯野鄙にも非ず、又如何に耐忍力に強くとも執念深きに非ず、又如何に敏捷なるを尊ぶと雖ども巧佞なるに至らず、忠とマメニ、良とオトナシク、易とスラリとして、直とスナラなるこそ我日本同胞の性習ならぬ。尤も事に依りては此性習と相反することも有るべきなれども、概して論ずれば日本固有の性習は此に外ならず。

然るに此の如きを本邦人固有の性習と見たる上よりしては、陸軍武官に在ては取りも直さず此性習を助け長じて一般軍人の風尚となすこと尤も便易にして、且武人には適當の性習なるべし。

西周は日本人の性格を「忠良易直」と規定し、これを敷島の歌に詠まれた山桜のイメージに基づいて議論している。桜花は艶麗な牡丹にも清潔な蓮花にも及ばず、椿や木槿のように腐敗するまで枝に残るような醜態はさらさず、見る価値のない棗や袖のようにではない。桜花のように、日本人固有の属性は「忠良易直」であるというのである。つまり、桜花の属性を日本人の精神の属性に重ね合わせるわけである。そうして、その精神の属性を日本人全般の精神から限定し、軍人精神の属性にスライドさせる。

桜花の属性から抽出された日本人の「忠良易直」を陸軍の軍人の「風尚」と読み替えている。「軍人」を「武人」と言い替えているが、これは武士を想起させる言葉である。これが『兵家德行』の中に記された言説であることを考慮すれば、ここまで述べてきたことはすべて日本の軍人をめぐってなされた考察であったということになる。宣長の敷島の

歌を發端にして展開された論理が行き着くところは、極端に単純化すれば武士道精神であったと言ふことができよう。敷島の歌と武士道精神を結合させる契機は、新渡戸稲造『武士道』である。新渡戸門下の矢内原忠雄が『武士道』を和訳し、刊行したのは昭和十三年のことであつた。それから『武士道』はブームになつた。原著の刊行から四十年ほどを経てベストセラーになつたのである。すでに明治四十一年に和訳されているが、あまり流布しなかつたようである(注4)。そういった意味で、戦時下という時代が『武士道』を甦らせたのかもしれない。『武士道』十五章「武士道の感化」には次のようにある。

武士道はその最初發生したる社会階級より多様の道を通りて流下し、大衆の間に酵母ばんだねとして作用し、全人民に對する道德的標準を供給した。武士道は最初は選良エリテの光榮として始まつたが、時を経るに従ひ国民全般の渴仰及び靈感となつた。而して平民は武士の道德の高さに迄は達し得なかつたけれども、「大和魂」は遂に島帝国フオルクスガイネの民族精神を表現するに至つた。若し宗教なるものは、マシユー・アーノルドの定義したる如く「情緒によつて感動されたる道德」に過ぎずとせば、武士道に勝りて宗教の列に加はるべき資格ある倫理体系は稀である。本居宣長が

敷島の大和心を人間はは

朝日に匂ふ山桜花

と詠じた時、彼は我が国民の無言の言をば表現したのである。

然り、桜は古來我が国民の愛花であり、我が国民性の表章であつた。特に歌人が用ひたる「朝日に匂ふ山桜花」といふ語に注意せよ。

武士道は本来、武士社会に發祥し、武士階級に固有の理念であつた。しかしながら、時を経て階級を越えて日本人に共有されるようになった。そして、武士道は高度の道德を有する宗教的境地を拓いたという。ここには「武士道」と「大

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

和魂「大和心」とを同一範疇のものとして扱う姿勢が見られる。その媒介になっているのが、他ならぬ宣長の敷島の歌である。このような連想によって、敷島の歌と武士道精神が出会い、そして時を越えて戦時下に甦った。あたかも宣長が武士道精神を説いたかのように喧伝された。

次に、「散る桜」の説について見ていこう。敷島の歌はあくまでも「朝日に匂ふ山桜花」を詠んだ歌であって、「散る桜」を詠んだ歌ではない。ところが、いつからか歌の趣旨とは無関係に「散る桜」を詠んだものとして解釈されるようになった。これには武士道からの連想が想定されるところである。「花は桜木、人は武士」という諺は、花の中で桜が最も優れているように、人の中で一番であるのは武士だといった意味であるが、桜の花が潔く散るように武士は死に際が潔いという意味で解釈されることがある。潔く命を落とす武士に対して、風が吹いて潔く散る桜というイメージの重ね合わせである。日本浪漫派の保田與重郎は次のように述べている（注5）。

しきしまの大和心を人間はばと歌はれたやうに、花の美のいのちは、朝の日のさしそめる瞬間に、その永遠に豊かな瞬間に、終るものといふ。日本の心をそれに例へたのは、さすがに千古の名歌と、永く国民のすべてに吟誦される所以であつた。美しい花はいづこにもあるだらう。花に対する観賞や美学に日本人は古ながらの日本を愛してもよいのである。

敷島の歌を踏まえつつ、この中に「散る桜」のイメージを読み取っている。美は瞬間であり、しかも永遠であるというロマン派のテーゼを桜に擬して捉えている。朝日に照り映える桜の姿の背後に、忍び寄る死を夢想しているのである。

この「散る桜」のイメージは、敗戦濃厚な戦時下において、よりいっそう漆黒の輝きを放つ。昭和十九年十月に神風特攻隊が編制された時、各部隊に付けられた名称が敷島の歌から採ったものであった。新聞報道は次のように解説している（注6）。

神風隊はこの特別攻撃機隊の総称で、その下に敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊及び菊水隊の諸隊がある。死所を得れば鮮かに散るわが大和魂、その大和魂を詠じたかの「敷島の大和心を人とは、朝日に匂ふ山桜花」の一首よりそれ〴〵その隊名を選んだものであり、また菊水隊とは楠公父子の七生報国の精神にちなんで名づけたものである。「死所を得れば鮮かに散るわが大和魂」を詠じたのが敷島の歌であることが前提となっている。特攻隊は片道の燃料しか充填せず、敵艦に体当たり攻撃をする決死の作戦である。命名に関わった軍部もこれを伝える報道も、ともに敷島の歌に「散る桜」のイメージを読み取っていたと言える。

このように近代における敷島の歌は、武士道精神と「散る桜」の説といった、近世期には考えられなかった誤読に見舞われることとなった。そして、その解釈は日本精神論の流行ともシンクロして、ますます一人歩きしていくことになった。

さて、三つ目として「日本精神」が取り沙汰されるようになって、その説明の便宜のために敷島の歌が利用された。川田順は『幕末愛国歌』（第一書房、昭和十四年六月）の中で、敷島の歌をめぐって桜における種々様々な特徴に言及した上で、次のように論じている。

さうして此等の諸特質はやがて我が国民性に叶ひ、日本精神とも通じてゐるのである。宣長は蓋し此の日本精神の象徴を桜花に最も濃く発見したのであつた。しきしまの大和ころとは、取りもなほさず日本精神の謂である。であるから、此の歌を解して、一部の人々が、「日本人の風流心」とのみ考へる如きも、亦誤謬であらねばならぬ。風流心と云ふやうな、薄べつたい、狭いものを宣長は歌つたのでない。要するに、桜花の美の種々相を研究し、日本精神の広く大きく深く含蓄多きものなる事を知つた上で、宣長の名歌を味読せねばならぬ。

桜における種々の様相は陽気な趣から散り際の潔さまでを含めて、「日本精神」の概念規定に沿うものであるという。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

桜の「風流心」だけを取り上げるのもまた誤りであるというのである。つまり、敷島の歌に詠まれた桜は「日本精神」を等身大に表現しているというわけである。敷島の歌は「日本精神」の多様性を伝えるのに格好の材料となったのである。

敷島の歌は戦時中、『愛国百人一首』に採録されて広く一般にも知られるようになった。『愛国百人一首』とは、日本文学報国会が情報局と大政翼賛会の後援のもと、毎日新聞社の協力により編んだもので、昭和十七年十一月二十日に各新聞に発表された。大東亜戦争開戦一周年を記念する行事の一環である。選定委員は佐佐木信綱をはじめとする十二名の歌人・文学者であり、全国から推薦のあった愛国歌を吟味して百首を厳選したものである。数ある解説書は「大和心」に関して、一貫して「日本人の伝統的に持てる心、すなはち日本精神のこと」という解釈をしている（注7）。

これを受けて、国民学校初等科六年生の国民科国語の教科書『初等科国語七』に敷島の歌が掲載されることとなった。教師用の指導書には、次のように書かれている。

第四首は、本居宣長が、寛政二年八月、自画像に賛をした有名な歌で、日本精神を、朝日に照り映える山桜の象徴によつて歌ひ出して余蘊のないものである。随つて、「いかにもわがやまと魂をよく表してゐます」といふ文のことはを生かして指導する必要がある。「朝日にはほふ」の「にはほふ」は照り映える意で、「朝日の光に輝いて、らんまんと咲きにほふ山桜の花」と説明されてゐる通りである。（後略）

敷島の歌の第二句「大和心」を「日本精神」と読み替えることに躊躇というものがない。中学修身教科書の中の「日本精神」については第六節で詳説するが、「日本精神」が初等科の教科書にまで浸蝕していたのは驚嘆に値する。要するに、「日本精神」は宣長の唱えたものとして、日本国民の常識となったのである。

三、日本精神論の誕生と定着

「日本精神」とは何か。「日本精神」は特定の典拠を有する用語でもなければ、特別な意図をもって創られた造語でもない。「日本」と「精神」という古来からある漢語の組み合わせに過ぎない。したがって、幕末期における「尊王攘夷」や明治期における「忠君愛国」のように、強いメッセージを有し、民を導くために掲げられたスローガンとは言えない。日本精神とは、言ってみれば、「日本」の「精神」という普通名詞というほかはないのである。しかしながら、いやそうであるがゆえに、「日本精神」とは何かということが盛んに議論された。日本精神論というジャンルが成立するゆえんである。

以上のような経緯に鑑みて、「日本精神」の初出文献を探り出すのはきわめて困難を伴うと言わざるを得ない。あまたの日本精神論がその出自を追究しつつも、最終的には曖昧な結論を甘受するしかないのは、その用語自体のインパクトの弱さに起因すると思われる。村岡典嗣によれば、明治末年頃にはすでに使われていたというが、何か特定の根拠に基づいた指摘ではない（注8）。大正時代に大川周明によって確立されたとする子安宣邦の議論も、思想家の影響力という点では見るべきものではあるが、典拠探索という観点から見れば、核心を外している（注9）。いずれにせよ、「日本精神」は誰かが使い始めたというよりも、自然発生的に用いられるようになったというのが実状ではないだろうか。問題は初発ではなく、その展開である。

日本精神が注目されたしたのは、先述したように、大正末年頃に大川周明『日本精神研究』（行地社、昭和二年五月）や安岡正篤『日本精神の研究』（玄黄社、大正十三年三月）が刊行されたことを契機とする。大川は猶存社から行地社へと展開する日本主義政治団体を主催し、雑誌『日本精神研究』を創刊した。社会教育研究所に籍を置いた安岡もまた、金鶏学院を創立した。その目指すところは、「篤志ノ師弟ト相扶ケテ深ク聖賢ノ学ヲ修メ、聊カ国家ノ風教ニ尽ス所ア

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

ラムコトヲ庶幾フ」（金鶏学院設立趣旨）ことであり、そこでの教授科目は、日本民族精神ノ研究をはじめとする七科目であった。顧問として、内務官僚や軍人、政財界の有力者を招いて、一定の影響力を持った。

大川や安岡と同時期に『日本精神史研究』（岩波書店、大正十五年十月）を刊行したのは和辻哲郎である。同書の内容は、古代における仏教受容に始まり、美術・彫刻・文学から歌舞伎に至る研究であり、宗教や芸術を組上に載せて日本文化を解明しようとする試みであった。つまり、『日本精神史研究』は「日本精神」という抽象概念を対象としたものではなかった。そのことは和辻自身も言及している。『続日本精神史研究』（岩波書店、昭和十年九月）に「日本精神」という論文が収録されている。初出は岩波講座『東洋思潮』第四回「東洋思想の諸問題」（岩波書店、昭和九年九月）であり、『続日本精神史研究』に収録された論文の中で最も新しいものである。その冒頭に次のような文章を綴っている。

「日本精神」といふ言葉は目下の流行語の一つである。しかしそれが何を意味してゐるかといふことは、あまり明白ではないやうに思はれる。人が日本精神とは何であるかと問はなければ、それは誰にでも解つてゐる。しかし一度問ひ始めると段々解らなくなつてくる。遂には誰にも解つてゐないといふことが解つて来さうに思へる。少なくともこの問題について、に何かを書かされる自分は、実のところ好くは解つてゐないのである。さういふ自分に対してこの問題が割り当てられたのは、多分自分が『日本精神史研究』の著者だからだらうと思はれるが、あの書は「日本の精神史」に関する部分的研究を集めたものであつて、「日本精神」の歴史的研究ではなかつたのである。ここには和辻が「日本精神」を論じる立場が明確に記されている。一つ目は「日本精神」の流行、二つ目は「日本精神」の多義性と多様性、三つ目は旧著『日本精神史研究』が「日本精神」の研究書ではないということである。要するに、「日本精神」とは何かを真正面から論じるのはこれがはじめてだつたのである。このような三つの論点に基づいて記された当該論文は、当然のことながら旧著とは異なる論調となつた。和辻は「日本精神」とは何かということを真正面か

ら究明しようとするのである。

まず、幕末期の「尊王攘夷」や日清・日露戦争期における「忠君愛国」と比較する中で、「日本精神」の反動思想としての性格を顕在化させる。そして、「日本精神」の実体をその「発露」において捕らえることを提唱する。つまり、精神とは日常とは異なる状況が出来した時に、それに反応して生成するものであるというのである。このようなとらえ方は「日本精神」が流行する時局をも解明する契機になった。たとえば次のように述べる。

今や世界史に於ける日本の「使命」は未曾有の重大さを以て実現を迫りつゝある。日本精神の標語はかゝる情勢の表現とも見られ得るであらう。

このような表現から和辻の時局を分析する視点を読み取ることができるだろう。だが、見方を変えれば、和辻自身が時局に照応しているさまを垣間見ることができるかもしれない。時局に巻き込まれていると言つてもよい。明らかに和辻の立場は変化したのである。

和辻の両著作における趣旨の変容は、単なる和辻個人の問題ではなく、日本国内における日本精神論にも該当する。それはそのまま昭和ゼロ年代における日本精神論の深化ということもできる。そこで昭和ゼロ年代に日本精神論が発展した証拠として、「日本精神論の調査」を参照することにした。昭和九年六月、文部省は学生部を拡充し、思想局を設置した。思想局は国民精神文化研究所を管轄するかたわら、日本精神論に関して干渉し、支配体制を整え始める。その手ははじめに日本精神論を網羅的に調査したのである。「日本精神論の調査」は昭和十年十一月に調査・発表された報告書で、文部省嘱託の五十嵐祐宏・亀坂文衛・奥田直登の三者によって執筆されたものである。凡例に「本調査は日本精神の至醇なる発揚に資せんがために、主として昭和の初より今日に至るまでの間に現れた日本精神論の内容を調査することを目的としたものである」と記されている(注10)。時あたかも昭和十年という年は、一般にも日本精神論が流行

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

し、一世を風靡したかのごとくである。学者や思想家が種々様々な説を唱え、百家争鳴にして百花繚乱といった様相で、収拾がつかない状況であった。思想局はこのような情勢を受けて、実態を調査し、事態を整理・分析することが必要と判断したものと考えられる。

このように調査された報告書は二部仕立てとなっている。前篇は日本精神論を整理し類型化したもので、後篇は調査対象となった論者を論者五十四名ごとに取り上げて要約したものである。前篇ではすでに存在するいくつかの分類を批判的に検討し、次の三類型を導き出した。

一、革新的日本精神論

二、理論的日本精神論

三、実践的日本精神論

まず革新的日本精神論とは、左翼の思想や運動に対抗して起こり、国家の諸機構を徹底的に改造し、日本をあるべき姿に革新することを主眼とする者。次に理論的日本精神論とは、明治以来の日本が欧米の思想や文物の流入する中で見失われた、日本精神を理論的に究明することを主眼とする者。第三として、実践的日本精神論とは、前二者の中道を行く者として次のように定義される。

実践的日本精神論は、日本精神の理論的闡明を斥けるものでもなく、又現機構の欠陥を批判是正することを等閑に付するものでもないが、革新的日本精神論が徒らに国家の現状を憤慨して社会機構の急進的改造を企図し、対立と闘争に墮して国憲、国法を紊し、「和を以て貴し」とする我が国本来の面目を忘れ、中道を逸脱してかへつて国民の和衷協同を破るに至る弱点あることを看破し、又他方、理論的日本精神論が動もすれば抽象的概念としての日本精神を弄するに止まり、日本精神の実践的把握を閑却し易き短所あることを洞察して、国民各自日々の生活の裡に

日本精神を実現すべきを主張するものである。

このような立場は、非合法的手段をも容認して急進的に国家を改造しようとする第一の立場を排斥し、「日本精神」の理論的闡明を実践への準備段階として認めるといふ、「日本精神論の調査」の報告書の立脚する立場を代弁するものである。つまり、この調査の目的は乱立し混迷する日本精神論を整理することから出発してはいるが、最終的には実践的日本精神論を日本精神論の標準として提示することにあつたと考えて間違いない(注11)。そして、この実践的日本精神論の代表として報告書に記されているのは、紀平正美や西晋一郎などの哲学者であり、国民精神文化研究所の重鎮であつた。なお、この調査および分析を受けて、翌年三月には「思想指導に関する良書選奨」を公表している。そこには選奨の度合いに応じて、推薦・紹介・選定の三つに分類する。推薦は「健全なる思想の涵養上有益」もの二十六点、紹介は「中正穩健なる思想の涵養上有益」なもの六十九点、選定は「中正穩健なる思想の涵養上又指導訓育上資する」もの七十点である(注12)。このように「日本精神論の調査」と「良書推奨」を結ぶ一連の動きは、文部省の既刊書活用による国民思想の洗脳として機能したと考えられる。

以上述べたように、日本精神論は大正末年頃に誕生し、昭和ゼロ年代に展開して盛んに論じられ、同時代イデオロギーとして定着していったのである。

四、辞書の中の「日本精神」(上) — 教育辞典

前節までに「日本精神」の誕生から定着までの展開について、研究論文や著書等に即してその内実を概観した。だが、学術レベルと一般の理解には齟齬と乖離、あるいはタイムラグが発生するのが常である。つまり、学術研究の到達点が一般の理解を得るためには、啓蒙という観点が不可欠であり、普及という活動が必須である。啓蒙と普及という点をもつ

日本精神論の敗戦—宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

とも体现しているのは、辞典や事典といった辞書類であろう。ここでは辞書類に掲載された「日本精神」の語義の変遷を通して、「日本精神」の拡がりを追究することにした。

まず、「日本精神」の辞書における比較的早い用例は、『現代教育辞典』（啓文社出版、昭和六年六月）であると思われる。

日本民族の生命と共に国民生活の中に遺伝せられつゝある至純至美の徳性及び他に比類なき情性の謂で、古来大和魂と称せられつゝある所のものが即ちそれである。而してその精神の中核をなす所のもは、実に忠君愛国の觀念と崇祖崇神の觀念とに外ならぬ。かの武士道なるものは日本精神の顕現にして、またよくそれを代表する所のものである。

「日本民族」に引き継がれた「徳性」と「浄性」という語義を説明しつつ、適宜「大和魂」といった類義語を挙げながら、概念を規定している。また、「忠君愛国」「崇祖崇神」という觀念が中核にあることを指摘する。さらに、「武士道」との関連性についても言及して定義している。比較的短い説明の中に、キーワードを盛り込みながら適切に定義していると言つてよからう。本書は満洲事变直前の刊行であり、「日本精神」が大流行する以前の記述であることを銘記しておく必要がある。興味深いのは、本書が日本教育学会協会の編になる書であり、「文検教育科受験者、師範学校最上級生並に實際教育家」（凡例）を対象に編纂された辞典であるということである。要するに、タイトルにあるとおり、「教育辞典」であるという事実である。このことは重要な事実を伝えている。つまり、「日本精神」は教壇に立つて生徒を指導する教育者が弁えなければならぬ言葉であるということである。教育関係の辞典がいち早く「日本精神」を収録し、解説したのは、注目すべき事実と言つてよからう。しばらく教育関係の辞典を追っていくことにしたい。

次に、『入沢教育辞典』（教育研究会、昭和七年六月）を見てみたい。「日本精神」は立項されてはいるが、そこには「国民性」を見よ」とあるだけで、何一つ説明はない。この直接参照の「国民性」を見ると、そこには「一国民に共通なる

特性をいふ」として、もっぱら「国民性」の語義の解説に終始している。つまり、「日本精神」は「国民性」の同義語という認識しかないわけである。はなはだ物足りないと言わざるを得ないが、「日本精神」生成の過渡期的現象と考えることもできる。

第三として、『教育学辞典』第三卷（岩波書店、昭和十三年五月）を取り上げよう。この辞典は昭和十一年から十四年まで刊行された全五巻の辞書であり、序によれば、「我国の教育を中心として項目を選定し、又一つの問題を充分に理解せしむるために大項目主義を採り、特に項目相互の聯関に注意した」とある。教育学関係の辞典としては本格的なものと言つてよからう。本項目の文責は和辻哲郎であり、前節で取り上げた『続日本精神史研究』の延長線上で執筆されたものと思われる。「日本精神といふ言葉は満洲事変以後特に著るしく用ひられ始めたものであるが、その意義は多様であつて一定してゐない」という文言で始まり、二千字に及ぶ分量である。そうして、その語義の多様性を次の三つの範疇に整理、分類して、その詳細を解説する。

(一) 普通に漠然と用ひられてゐる場合

(二) 広く日本民族の精神或は心の特性全体を日本精神の語によつて現はさうとする立場

(三) 日本文化の主体としての日本精神を考へる立場

第一の立場は「大和心」や「大和魂」と同義として扱われる。そこから導かれるものは「尊王心」であり、「天皇のために己れを捧げて奉仕する心構へ」であるという。その心構へは「尊皇献身」と言い換えられ、次のように論じられる。

この献身奉仕には身命を惜まぬといふ心構へが伴つてゐなくてはならない。だから大和心は「朝日に匂ふ山桜花」の深く散る姿を以て示され、大和魂は義勇奉公と結びつき、日本精神もまた武士道の復興を伴はうとしてゐる。

この立場にとって「身命を惜まぬ」という属性が不可欠であるとした上で、それが「大和心」や「大和魂」や「武士

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

道」などといった既存の概念との共通点であるというのである。それは第二節で見たように、敷島の歌の誤読によって導かれる「散る桜」の説や、武士道精神との同一視という発想から導かれるイメージである。一般に「日本精神」が有する中身は、そのような敷島の歌の拡大解釈によつてもたらされたものと言つてよからう。

次に、第二に立場から導かれるものは、「皇威の発揚」であると述べ、次のように続ける。

万世を通じて皇室は文化の源泉であらせられた。といふことは日本国民の文化的創造がそのまゝ、皇運の扶翼に他ならなかつたことを意味するのである。日本精神とはかゝる意味で皇威の発揚をなし遂げた日本人の精神的特性、或は日本の民族性である。

ここには「日本精神」を把握し、認識する方向性が明確に記されている。「皇運の扶翼」とは、『教育勅語』にある「天壤無窮の皇運を扶翼すべし」を踏まえた言説である。また、「皇威の発揚」とは、『国体の本義』「六、政治・経済・軍事」にある文言を踏まえた言説である。つまり、「日本精神」を皇室の文化の象徴として認識する観点に立つが、実際には近代以降に合意された了解事項に基づいた発想ということである。要するに、「日本精神」は用語だけでなく、概念もまた近代発祥の産物なのである。

また、第三の立場においても、「日本精神」は客観的な物を媒介としておのれを現す主体であると、それを体現したものと、「万世一系の天皇を戴く国家組織」を例示するのである。しかしながら、この立場は必ずしも日本単独で獲得されたものではなく、「他民族の文化を摂取し、これを媒介として力強く自覚の歩をすゝめる」という点に、日本精神の特性を認め、次のように展開する。

支那文化・印度文化・西洋文化のいづれに接しても、日本精神ほど謙虚にそれを受け容れたものはない。これらの文化を通じて己れを現はしてゐるのは支那精神であり印度精神であり西洋精神であるが、しかし日本精神は、これ

らの他者に於て精神としての同胞を見出し、同胞的な愛を以てこれらの精神を包擁した。さうしてこの包擁が同時に日本精神の大いなる生育であつた。

日本は、前近代においては、中国、印度といった異国と、近代以降においては西洋という異国の文化から影響を受けて、「日本精神」を育んできた。このような異国文化を排除せず、その良いところを取り入れるところに「日本精神」の包容力があるというのである。このような日本精神観は、昭和十三年というリアルタイムにおいて意義深いものである。他者を排除することによつて、自己の存在意義を確認することが戦時期において普通であるならば、影響の受け容れを率直に認め、さらにはそれこそが日本固有の特性であるとするのは、きわめて異例である。和辻の日本精神論の到達点と言つてよい。

このように「日本精神」について分類した三つの立場および語義のすべてにわたつて、和辻は尊王心や皇威といった心的特徴が備わつていると指摘している。それは昭和十年代に「日本精神」がたどり着いた概念である。この記述は辞典の項目執筆であるから、辞書の本来の性格として執筆者の独断ではなく、当時の共通了解を目指して書かれていたと考えることができる。ところが、当該辞書が「大項目主義」を採つていることも幸いして、和辻自身の観念もまた盛り込まれているのである。それは前節で確認した和辻の日本精神観と比較すれば明らかであろう。

いずれにせよ、『教育学辞典』「日本精神」は昭和十年代の日本精神意識を等身大に表すものと言える。それは日本の特性として天皇および皇室と切り離せない日本精神観である。それは昭和初年代にはなかつた観点であり、和辻における日本精神観が時局に共鳴しつゝ変容していった様子を如実にうかがうことができるのである。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

五、辞書の中の「日本精神」（下）―哲学辞典

「日本精神」は教育関係の辞典とともに哲学関係の辞書にも立項され、解説された。『教育学辞典』の刊行が始まった同年に『現代哲学辞典』（日本評論社、昭和十一年九月）が出版された。序によれば、「本辞書の編輯に於ける新機軸」として項目をすべて大項目とすることを唱っている。この点は『教育学辞典』と同じである。だが、三木清を編集代表とする同辞典は、「予想外の歓迎を受け、刊行後間もなく絶版の状態に至った」（新版「序」という、曰く付きの辞典であった。通常、発売当初に歓迎を受けた書籍は品切れになり、重版が掛かることはあっても、絶版になることはないからである。ここには本書をめぐる根深い問題が潜んでいる。そのことを念頭に置いて「日本精神」の項目を見てみたい。

「日本精神」は戸坂潤を文責とする。戸坂は京都帝国大学で西田幾多郎に師事して哲学を修めた。昭和七年には岡邦雄、三枝博音らと唯物論研究会を立ち上げ、研究と執筆にいそしむが、危険思想として取り締まられ、幾度となく検挙、投獄された。昭和十年には白揚社より『日本イデオロギー論』を上梓しているので、本項目を執筆するには適材適所であったと言えよう。「日本精神」は次のような記述で始まる。

一般的に云へば、日本民族の歴史が何等かの精神の表現であるとか、又はその表現自身がこの精神であるとか考へる立場に立つ時、この精神が日本精神と呼ばれる。之によつて日本民族の歴史がもつ本質が云ひ表はされると考へるのである。

このような一般的用法（「通俗的な語法」）の解説から始めるが、しだいに「哲学乃至世界観上の体系を想定した上で一つの理論的説明」へとシフトさせていく。そうして、「日本精神」の発生とその本質を次のように指摘する。

日本精神の提唱は、云ふまでもなく今日に始つたのではない。併し之が一定の意図の下に、広汎に提唱され又強調され又流行し始めたのは、×××××による満洲国独立と、之をシグナルとする処の日本ファシズムの急速な台

頭以来である。日本精神は日本××××の諸イデオロギーの共通な根本観念であり、又実にその合言葉又はスローガンである。

見てわかるとおり、ここには二箇所伏字がある。この伏字は戦後に刊行された第二版によって復元することができる(注13)。それによれば、最初の五文字は「武力的侵略」であり、二つ目の六文字は「ファッシズム」である。要するに、言葉狩りが行われたわけである。では、誰がどのような意図で言葉狩りをおこなったのか。

ここで、戦前における書籍の出版統制について概観しておきたい。出版統制といえ、内務省(警保局図書課)による検閲や発禁(発売頒布禁止)などが想起されるが、それほど派手でセンセーショナルなものばかりではない。むしろ背後から忍び寄り、いつの間にか動きが取れなくなるような体のものが多い。もちろん、明治二十六年に制定された「出版法」は、事前届出、納本や検閲などによる種々の制限規定を設け、違反出版物については出版、販売禁止や差押えなどの行政・司法処分規定を定めている。とりわけ、「安寧秩序を妨害し又は風俗を壊乱するものと認むる文書」(十九条)の刊行について、発禁処分を命じている。ただし、「安寧秩序」や「風俗」といった曖昧模糊とした表現のために、取り締まる側の拡大解釈がまかり通ったことは想像に難くない。特に治安維持法施行以降は政府に都合の悪い書籍は見せしめのために発禁処分に処せられることもあった。

このような出版統制の厳罰化の中で、著者や出版社の側も自主規制を掛けることが常態となった。つまり、著者は自粛して書きたいことが書けなくなり、出版社は政府の意向を忖度して著者の原稿に手を入れたり、危険思想を象徴する用語は伏字とした。つまり、伏字は出版統制の目をかいくぐって書籍を刊行するために、出版社側が講じた苦肉の策だったのである。前の引用文中の「武力的侵略」や「ファッシズム」は編集部による言葉狩りであった。

このように「日本精神」は語義解説の中に、当時における危険思想が紛れ込み、これを秘匿しなければならないよう

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

な概念であったということである。戸坂はさらに進んで、この概念の本質に切り込んでいった。

日本精神の内容如何に就いては日本ファッシスト達の間に初め必ずしも完全な一致はなかつたが、一九三四年（昭和九年）以来、右翼政治思想諸団体間の戦線統一がおのづから行はれると平行して、夫は遂に××××に帰着統一されることとなつた。日本の××の本義はこの××主義にあるのであつて、日本精神とは取りも直さずこの××意識だといふことに結着した。事実右翼諸団体の統一運動は、××・ブルジョア政党・反動諸団体の表面上強調する国体明徴の運動によつて、遽かに促進された。尨が××意識なるものは実は主として国家理論的な乃至は政治学的な技術上の観念であり、主として憲法の法律学的解釈の問題に結びついてゐたのであるから、各種の内容の日本精神は反自由主義的憲法解釈に於て、共通な一致した三角点を発見することが出来る。従つて日本精神の内容は又この点に集中加重される。アジア主義や王道主義の声は衰へ農本主義の教説は無用となり、独り××主義・××観念だけが××精神の中心に置かれることとなる。

見て明らかであるが、ここには伏字が横溢している。試みに第二版により、伏字を復元すれば、次のようになる。

××××に帰着統一↓国体明徴に帰着統一

××の本義↓国体の本義

××主義↓絶対主義

××意識↓国体意識

××・ブルジョア政党↓軍部・ブルジョア政党

××意識↓国体意識

××主義・××観念↓絶対主義・国体観念

××精神↓日本精神

全体として、「国体」という用語が狩り取られている。また、「軍部」や「絶対主義」なども自主規制の対象になったのであろう。しかしながら、こういった言葉狩りが徹底して行われたのではないことは、二度目に出る「国体明徴」が残っていたりすることでもわかる（注14）。また、最後の「日本精神」に至っては、項目語であるにもかかわらず、これを伏字にしているという不徹底ぶりである。はたしてこのことをどう考えればよいだろうか。

これが出版社編集部の怠慢であるとすれば、内務省警保局図書課（昭和十五年からは検閲課）の検閲をくぐり抜けて出版に漕ぎ着けるために、申しわけ程度に形ばかりの言葉狩りをおこなったに過ぎないとも考えられる。また、出版社編集部意向によるものであるとすれば、伏字はスタンドプレーに過ぎず、あえて類推可能な用語をブランクにしておくことにより、本書を手にとった読者が空欄補充できるように仕掛けておいたとも考えられる。いずれにせよ、伏字が溢れた『現代哲学辞典』は見事に検閲官の目をかいくぐり、出版されたのである。

しかしながら、一度は日の目を見た『現代哲学辞典』も、「予想外の歓迎を受け、刊行後間もなく絶版の状態に至った」（前掲、新版「序」というのである。ここに来て、この序文の表す真意が判明する。「歓迎」を受けたこともあながち身内ばかりでもあるまいし、「絶版」とされたのも歴史的事実であろう。つまり、「予想外の歓迎を受け」たのは、三木清や戸坂潤をはじめとする唯物論研究会およびそのシンパの反応であり、「絶版の状態に至った」のは、出版差し止め処分を避けて重版に及ばなかったのであろう。そのように解釈すれば、新版「序」における不可解な文言の意味するところが明らかになる。

さて一方、曰く付きの初版が好評のうちに絶版となった後、『新版 現代哲学辞典』（日本評論社、昭和十六年三月）が出版された（注15）。初版の刊行から四年半後のことである。三木清の序の一部は前に見たが、「新版」の編集方針に

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦—宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

関して、次のように記している。

今回書肆の求めに依り新版を世に送るに就いては、これをその名の如く現代的なる辞典と為すべく、その後の学問並びに社会の趨勢の変遷に応じて、内容の一新を企てた。かくて前の執筆者のほか新たに斯界の諸権威諸精鋭の協力を得て、時代の要求する諸項目を多く加へると共に、全項目に互つて書き更へを行ひ、茲に本辞典は全く面目を新たにして現はれることになつたのである。

ここには「新版」の編集にあつたての心掛けと方針を記している。一つ目は「現代的なる辞典」にすることで、そのために「内容の一新」を目指すという。二つ目は執筆陣を増やして辞書項目を増加し、「時代の要求」に応えるという。この編集方針からは、初版本『現代哲学辞典』の増補更新版を目指したものであると受け取ることができる。だが、単純に増補更新版を出版するのが目的とはいえないところがある。

まず、初版本と新版を比較すると、執筆者に異同がある。初版本では、執筆者が三十二人であつたが、新版では四十六人となつた。これは単純に十四人の執筆者が増加したということではない。初版本の三十二人のうち、新版にも名を連ねるのは二十二二人であり、十人が姿を消している。そうして、二十四人が新たに加わっているのである。すなわち、半数以上の執筆者が入れ代わつたことになる。当然ながら、項目も初版本から新版にかけて執筆者が交代したものもある。「日本精神」もその一つであつた。

新版における「日本精神」の項目執筆は三枝博音である。三枝は戸坂潤と同じく、唯物論研究会の主要メンバーであつたが、初版本には参加していなかつた。なお、戸坂が初版本で担当したものは四項目であつたが、新版においては「自然科学」（新明正道）、「新聞」（新版には当該項目なし）、「論理学」（池上謙三）である（注16）。ともあれ、三枝博音は初版本で「日本精神」を執筆した戸坂に代わつてこれを担当したのである。大項目主義の例に漏れず、本項目は「一」「日

本精神」といふ言葉、「二 日本精神の意義」、「三 日本精神といふ概念の最近の発展過程について」という三節より構成される。第一節は「日本精神」における「精神」が持つ意味について、三浦梅園の「神」概念を導入して解釈する。

なお、梅園は当時の三枝が専門とした思想家である。第二節は「日本精神」が「日本的なもの」を追究する日本主義運動と不可分の関係であることを立証する。第三節は「日本精神」の概念をめぐる、明治時代から昭和十年代までの変遷を時系列で紹介する。この中で分量的に全体の七割を占める第三節について見ていきたい。

「日本精神」の用語と概念について、三宅雪嶺や高山樗牛などを祖上に載せながら、明治期にはなかったとする。大正期になって、北一輝・大川周明・安岡正篤などの著作に「日本精神」の濫觴を見る。その後、モラエスや和辻哲郎を經由して、昭和五年の紀平正美『日本精神』の刊行を経て、「日本精神」の流行へと至る。

ここで、『新版 現代哲学辞典』にのみ言及され、他の辞書には見られない事柄を三点指摘しておきたい。一つ目は、時折挿まれる左翼分子の活動についての記述である。それは、「因みに」という語を媒介にして巧妙に誘導される。次の如くである。

因みに、日本共産党員が、全国一斉に検挙せられたいはゆる三・一五事件は、昭和三年三月十五日である。「思想善導」の機関が、文部省直轄のもとに設置せられたのは同年九月である。又、いはゆる四・一六事件は昭和四年四月十六日である。

紀平正美『日本精神』の序文に出る「近時思想の動搖」を解説する文脈で言及されるが、そこには、三枝自身が身近で経験した事柄が投影されている。また、昭和六年九月に勃発した柳条溝事件の時代状況を述べる際にも、次の事柄を書きくことを忘れなかった。

因みに昭和六年三月に、左翼運動の一側面としての反宗教運動が起り、同年九月には文部省内に思想対策の方法が

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐる―(その二) (田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

講じはじめられた。

三枝はこの年はドイツに留学していたが、帰国後に戸坂潤とともに唯物論研究会を立ち上げて、共産党シンパの廉で検挙、拘留された。こういった自身にまつわる経験を織り込みながら、執筆されている。

『新版現代哲学辞典』の二つ目の特徴は、「日本精神」と軍部との密接な関係である。次のように問題を指摘している。

昭和七、八年以後の「日本精神」運動に関しては、日本の陸海軍人の日本主義運動のことが、最も留意せらるべきものの一つであらう。

昭和七年といえば、「日本精神」の流行が顕在化した時期である。その時期にすでに「陸海軍人の日本主義運動」が高まっていたというのである。軍人による日本主義運動について、その活動内容を時系列で解説する。次の四団体である。

- (一) 国本社（大正十三年創立）
- (二) 国維会（昭和七年創立）
- (三) 皇道会（昭和八年創立）
- (四) 明倫会（昭和八年創立）

このうち、(三) 皇道会を取り上げて、その綱領を紹介し、既成政党の打破と国際正義の貫徹の二点について、その今日的意義を指摘する。それは大政翼賛会の結成（昭和十五年十月）やABC D包圍網への抵抗等を示唆している。昭和十六年の時点においては、かなり踏み込んだ記述と言ってよからう。

さて、『新版現代哲学辞典』に見られる三つ目の特徴は、「日本精神」がどのような方面で興味を持たれ、関心の的となっていたかという点に関して、極めて的確な指摘があることである。

昭和十年、十一年、十二年の頃に現はれた日本精神に関する労作は実に夥しい数に上つてゐる。この時期にては、

それらが主として教育者によつて企てられてゐることも亦留意されてよからう。

昭和十年からの三年間、「日本精神」は全国的に流行したが、その企画者が「教育者」であつたことに注意を促している。そのことは、末尾に近い次の指摘にもうかがえる。

政治的運動の場合には、主として「日本主義」なる言葉が使用せられる。「日本精神」なる言葉は、思想運動、教化運動、学校教育などの方面に於て、日本主義が唱へられる場合に用ひられる。

「日本主義」と「日本精神」がほぼ同種の方向性を有する概念であるにもかかわらず、それが用いられる場が異なることを指摘している。つまり、「日本主義」は政治的運動において、「日本精神」は文教運動において使用されるというのである。この指摘は極めて重要な点を言い当てている。「日本精神」は学校教育の場で用いられる。前節で教育関係の辞典に「日本精神」が必須であつたことを考え合わせれば、話のつじつまがうまく合う。「日本精神」は教育現場で広まつた概念なのである。誠に正鵠を射た指摘と言つてよからう。

このように大項目主義の名に恥じない『新版現代哲学辞典』は、初版に勝るとも劣らない好評を博したようであるが、刊行から一年後に突然終焉を迎える。出版法十九条の適用を受け、安寧秩序を妨害する書籍として発禁処分となつたのである（注17）。時代は閉塞し、すでに大東亜戦争に突入していた。

六、中等修身教科書の「日本精神」

辞書と同じく、多くの若年学習者が手に取り、知識を吸収する媒体が教科書である。昭和十年代になると、時局を反映した内容および表現が教科書に取り入れられるようになった。前節までで見たように、「日本精神」は哲学辞典や教育辞典に立項され、解説された。教育現場においては、中等学校の修身教科書がターゲットになった。ただし、最先端

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

の研究と教育現場との間にはタイムラグが発生するものである。また、「日本精神」を取り上げた修身教科書は必ずしも多くない。そういった事情もあり、研究成果が教育現場に下りてくる時差の間に日本は敗戦し、「日本精神」が無効化された。そういったところにも「日本精神」の特殊性があると言えよう。ともあれ、一時的にはあれ、教科書に掲載され、教室で取り上げられた概念として「日本精神」を考えてみたい。

まず、戦前の教育制度における中等学校（旧制中等学校）の位置づけについて記していこう。尋常小学校または国民学校初等科（昭和十五年以降）を卒業した者が進学する場合、高等小学校（昭和十五年以降は国民学校高等科）に進学するか、中等学校に進学した。中等学校は、旧制中学校・高等女学校・実業学校の総称であり、この種別によって標準卒業年限が異なるが、使用する教科書は段階的に流用されたようである。

中等教育の修身教科書に「日本精神」が取り上げられた初出は、得能文編『現代中等修身』巻三第十九課「日本精神」であろうと思われる。昭和五年九月発行である。九ページに及ぶ記述のために、すべてを検討することはできないので、適宜内容を抜粋しながら検討していきたい。まず、全体の構成は次のようになっている。

第一節 伝統的精神

第二節 日本精神の特色

第三節 日本精神の自覚

各節の内容を検討していこう。「伝統的精神」（第一節）では、国民はいたずらに他国の長所を羨むのではなく、日本に伝わる伝統的精神（日本精神）を自覚しなければならないことを述べる。それでは「日本精神」とは何か、ということとを「日本精神の特色」（第二章）で展開する。第二章は次のような文章から始まる。

我等は今過去の日本人が創造・建設してくれた日本精神に於て生活しつゝあるのである。既に日本精神といひ、大

和魂といへば、何物か彷彿として眼前に迫つて来るのを覚える。本居宣長は大和魂を詠じて、「朝日に匂ふ山桜花」と言つた。日本人は皆はつきり之を意識して居る。それは日本歴史から得られる或者である。我等の日々の行動を支配して居る或者である。

まず、「日本精神」が過去から受け継がれたものであるとした上で、「日本精神」と「大和魂」を並列してこれを論じてるのである。このように最初から「日本精神」と「大和魂」を同一視する観点は、そのまま本居宣長の敷島の歌へとつながっていく。敷島の歌で詠まれているのは、厳密に言えば「大和心」であつて「大和魂」ではない。これはある種の連想とすることが出来る。「日本精神」＝「大和魂」＝「大和心」であり、それは敷島の歌にこれが詠まれていて、すべての日本人がそのことを知っている。そしてそれを「日本歴史から得られる或者」と言い、「我等の日々の行動を支配して居る或者」と言う。ほとんど説明になつていない言説であるが、この表現には意味がある。この教科書の教師向けの教授書には、「或者」について次のような解説を施している（注18）。

概念的に表はすと、全体が表はせない。それは知的・情的・意的を兼ねた或者である。我等の直覚し、直感し、実行する或者である。之を究めること深きに從つて益々深みを有する或者である。故に、或者といつた。

これが「或者」に関する注釈であり、教師が教室で生徒に説明するための解説である。「或者」という用語は中身が空虚であり、知情意を兼ね、「直覚し、直感し、実行する」しかないものであるという。たしかに、この説明は何とも茫漠としてつかみにくく、苦しまぎれの言い訳に聞こえてしまう。意味不明としか言いようがない。だが、その具体的内容は後続する段落にまとめられている。「日本精神」の特色について五種類に分類して、次のように説明している。

(一) 君民一体―私事私欲を顧みないで大君に事へまつる

(二) 独立自尊―国体の自覚、国体の尊厳

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

（三） 誠実無私―正直・清浄、心の誠

（四） 実践躬行―意気で行く

（五） 高潔雅馴―詩人や芸術家の境地、高雅

項目の概念をまとめて四字熟語で表現するのは当時においてはよくあることで、たとえば日本人の精神性を最初に指摘した芳賀矢一『国民性十論』（明治四十一年）をはじめとして枚挙に暇がない。これらの項目は当時においては、おむね実行すべき徳目として見た場合、さして特異なものではない。それは『国民性十論』における忠君愛国から温和寛恕までの十条を簡略化したものと考えられることもできるほどである。きわめて普通にある一般的な項目と言つてよからう。もちろん、そういったやる気になれば誰にでも実行できる無難な項目であるということは、それ自体悪いことではない。むしろ、誰もが実行できることが重要なのである。そのような意味で、「日本精神」の特色はよくできた徳目と言えるかもしれない。

さて、「日本精神の自覚」（第三節）は、前節の五つの特色を踏まえて、日本精神を自覚し、日本精神を失わないことを鉄則とすると主張する。また、日本に足りないものは外国から学び、それを独自に工夫して磨き上げることを課題とする。その例として、科学や哲学の研究、技術の鍛錬、社会施設の考究を挙げ、それらが「日本精神」に基づいておこなわれるべきことを主張する。この「日本精神に於て為さねばならぬ」という箇所に関して教授書は次の如く述べている。

日本精神の自覚が出发点であり土台である。此の自覚を失はない限り、ロシアを学びアメリカを学んでも、得る所益々大である。若し此の自覚を失ひ、ロシア魂を以てすれば、国史を学んでも、唯物史観や革命理論で之を見誤らうとするであらう。此の自覚が最も大切なのである。

「日本精神」の自覚が最も重要であることを述べて、それが欠如した時の弊害にも説き及ぶ。「露西亜魂」に魅入られ

た場合、「唯物史観」や「革命理論」によって国史を見誤る欠点を指摘するのである。この「唯物史観」や「革命理論」は当時の日本において最も忌避されるべきイデオロギーであり、前節で確認したように出版される前に確実に伏字にされる忌み言葉だったのである。もちろん、この教授書は文部省公認の出版物であり、それらの概念を教えるためではなく、教えないためにここに記しているのである。つまり、「唯物史観」や「革命理論」は「日本精神」の対立概念として想定されていたということである。そのことは生徒が手にする教科書の文面には表れないが、教員が手にする教授書に記され、授業では触れられたことであろう。そうして、一連の共産主義思想については、これを徹底的に罵倒し、排除する方向で誘導したものと思われる。戦前の思想教育は、その痕跡も残さず、かくも巧妙に行われていたのである。さて次に、小西重直編『昭和中学修身書』巻五第十九課「日本精神」を見てみたい。昭和十年三月の発行である。まず、全体の構成を見てみよう。

一、民族固有の精神

二、日本精神の特色

三、儒仏の影響・武士道の貢献

四、日本精神の発展

各節の内容を検討する。「一、民族固有の精神」は「日本精神」が国民道徳の上に発現したものであり、儒教・仏教・西洋文化が渡来する以前から存在した大和民族固有の精神であって、太古は「惟神の道」と称していたという。

次に、「二、日本精神の特色」は太古からの「惟神の道」は教育勅語の中に現れた「国体の精華」を基盤とすることを確認した上で、その特色を以下の四つに分類する。すなわち、第一に明朗、第二に純潔の尊重、第三に発展力の豊富さ、第四に同化統合の重視である。この特色について触れていきたい。第一の「明朗」については、全文引用する。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

第一に明朗を特色としてゐる。陽性であつて陰鬱な厭世的な点がない。快活である。昇る旭日の如く、積極的活動的にして、しかも爽かな朗かな気分を備へてゐる。本居宣長先生が「敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜花」と詠んだのも、この特色を花に譬へたのである。

「明朗」とは、「陽性」や「快活」というイメージで語られる。また、「昇る旭日」に見立てて、「積極的活動的」で「爽かな朗かな気分」が備わっているとされている。この「昇る旭日」の見立てから、「朝日に匂ふ山桜花」を下句に配置する宣長の敷島の歌を紹介するわけである。ここでは、敷島の歌は陽性の明るいイメージ（「明朗」）が主体であり、決して散る桜のイメージではない。あくまでもポジティブなイメージであつて、いささかもネガティブなイメージはないのである。このことは確認しておきたい。

第二の「純潔の尊重」については、神社に最も典型的に現れた特徴で、心身ともに清浄であることから、正直・廉潔を重んじ、卑怯・未練を卑しむ心性として発現するものである。武士の切腹はこの精神からの帰結であるという。また、古典に出る「明き浄き心」がこれに該当する。第三の「発展力の豊富さ」は、「日本精神」の目指す理想が広大悠遠であり、その理想を実現すべく努力を続けたという歴史に言及する。それは天照大神による天壤無窮の神勅や、神武天皇の八紘一宇の勅語に現れた宏大無限さに基づいており、歴代天皇によつてそれが実践されてきたという。しかも、それが現代における国運の興隆につながっているという。第四の「同化統合の重視」は、神話における「国引」を例として、日本は外国の思想や文化を受け入れる土壌が存在したことを述べ、いたずらに外国を排斥するような偏狭で固陋なものではなかったとする。たとえば、隋や唐の制度や風俗は大いに移植されたことを挙げる。

「三、儒仏の影響・武士道の貢献」は二の第四における同化統合重視の土壌を受けて、儒教と仏教、そして武士道を受け入れることにより、日本文化を発展させてきた経緯について論じる。まず、儒教は中国の精神文化を支える思想で

あり、修身・齐家・治国・平天下という理想や三徳や五輪・五常という徳目を骨子とするものである。これは応神天皇の御代に受け入れて、盛んに研究し、文化の発展に貢献するところ大であったという。また、仁義忠孝などの理念が太古から日本に存在したが、それに適切な名を付けたという成果も儒教の功績であるとする。

次に仏教は釈迦が印度で広めた教えで、欽明天皇の御代に日本に伝来した。儒教に比べて厭世的な傾向があるために調和に時間がかかったが、奈良時代以降、本地垂迹説の広まりとともに日本に定着した。その深遠な教理によつて単純素朴な日本人固有の精神が深められたという。

三つ目として、武士道は鎌倉時代以降に興起し、太古の「もののふ」や「ますらを」の精神を受け継いで武士階級に発達した道徳である。武士道精神は敬神崇祖・忠勇義烈・質素廉潔を重んじ、卑怯未練を厭い、儒教や仏教とともに取り入れたものであり、日本精神の発展に大いに貢献したという。

最後に「四、日本精神の発展」は、日本精神は前近代において儒仏や武士道の影響を受け、近代以降は西洋思想を摂取しつつ、連綿として日本文化が継続し、洗練され、醇化されて今日に至るとする。それは国民道徳や幽妙高雅な作品、鎮護国家の教理など、さまざまな領域で広がっていった。また、儒教や仏教も日本化された。江戸時代には国学が勃興し、幕末ごろから洋学も盛んになり、西洋文化を崇拜する風潮もあったが、近年に至つて日本精神が復活した、と締めくくっている。

七、「日本精神」の八月十五日

戦前・戦中期に盛んに取り沙汰された「日本精神」は、八月十五日を経てどうなったのか。ここでは、戦後すぐに「日本精神」に関する講演をおこなった、村岡典嗣と矢内原忠雄の論述をめぐつて考えてみたい。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐつて（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

村岡典嗣は昭和二十年九月十二日と十三日の両日に、東北帝国大学終戦記念講演会にて「日本精神を論じて敗戦の原因に及ぶ」と題する講演をおこなった。これは学生だけでなく、市民も聴衆として迎えた特別講義である。これを同年十一月中旬にまとめて執筆されたという（注19）。村岡は大学の定年退官直後の昭和二十一年四月十三日に没しているので、ほぼ最晩年の論述と言つてよい。戦時中の昭和十八年に「日本精神論」を執筆した村岡は、敗戦をはさんで再び「日本精神」を論じたわけである。しかもそれは「敗戦の原因に及ぶ」、冷静でしかも深刻な講演であった。

村岡は「日本精神」の特徴を分析し、その長所として（一）犠牲的精神と（二）大乘的態度という二点と、（三）独善的傾向と（四）軽信性（無批判的な憧憬）と（五）主観性（客観性の蔑視や軽視）という短所三点、合計五点の特質について詳細に検討を加える。その中で、（一）犠牲的精神を論じるに際して、本居宣長の敷島の歌を根拠にしていることが注目される。次の通りである。

まづ長所として犠牲的精神の旺盛がある。そは殊に戦争非常時局に際し、戦場などで發揮されるもので、至尊の為、国家の為に身命をすてて顧みないのである。過般しばしば、純真なる青少年戦士によつて示された特攻精神は、代表的なもので、心事の潔白に基いてのひたむきな感激の結果である。その崇高なる、また美しい道義の発露であることは、何人か否定しえよう。若し之を以て単なる名誉心に驅られての自殺的行為とする如きあらば、そは人間の至誠をいたづらに冒瀆する譏りを甘受せねばならぬ。而してその日本精神に由来することは、かの本居の大和心の歌が、いつしかその作者の本意を超えて、専ら散り際のいさぎよさをたたへたものの如く解されて来た事実にも証明される。

「日本精神」における犠牲的精神は戦場で發揮される自己犠牲の精神で、その典型的発現が「純真なる青少年戦士によつて示された特攻精神」であるとした上で、「かの本居の大和心の歌」（敷島の歌）に言及する。村岡は敷島の歌が本

来、朝日に照り映える桜を詠んだものであることを承知の上で、それが「散り際のいさぎよさをたたへたもの」として誤読されてきた経緯に注目し、その背景に日本精神の犠牲的精神が潜在していると考えているのである。つまり、敷島の歌の本意が桜の咲き様の「うしはしさ」から散り際の「いさぎよさ」へと読み替えられる遠因として、日本精神における犠牲的精神という特徴があるという認識である。

このように、村岡は日本精神が有するさまざまな特徴について、客観的にして論理的に、しかもきわめて冷静に分析する。そうして、こういった「日本精神」の諸特性が初動時の快進撃を招来した一方で、敗戦を導く一因にもなったという両義性を合わせ持ったことを的確に指摘する。そして、それらの属性が「尊皇攘夷」の色合いを帯びてくるに及んで、敗戦濃厚となった。そのような状況を村岡は次のように論じている。

吾人は尊皇攘夷といふ如き旧時の標語の、しかも何等歴史的考慮を伴はないで、復活するのさへを見た。而してこの一種の興奮が、麻醉剤的效果をとらなつて、独善的といひ、非科学的非実証的といひ、非計画的、非社会的といひ、非協同的といふ類ひの国民的短所や弊害に対する反省を失はしめ、または稀薄ならしめ、所謂本願ほこりに例ふべき国体ほこりの増上慢となつていたづらに上記の短所弊害を、ますます助長せしめたのであつた。敗戦の原因の最も根本的なものは、思ふにここに存すべく、而してその契機はすでに述べた如く、日本精神そのものに在るのであり、この点からして厳密にいへば、敗戦は思想的に日本精神の自殺である。

非常時局において「日本精神」は、いわば集団催眠を導くトリガーのように作用し、独善的・非科学的・非実証的・非計画的・非社会的・非協同的といった、あらゆるネガティブで現実逃避的な行動を招来したというわけである。本願ほこりならぬ「国体ほこり」とは、阿弥陀仏の本願がどんな悪人でも助ける本願だと甘えるように、日本の国体はどれほど形勢が劣勢に転じて、最後には神風が吹いて日本人を救ってくれると信じ、これに甘え、慢心することを言う。

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

日本精神がそのような国体ほこりを誘発し、最終的には敗戦に至ったといっているのである。村岡が最後に敗戦について、「思想的に日本精神の自殺」と断じているところは、きわめて厳しい断罪であると言つてよい。ここからは思想史家としての村岡の覚悟を読み取ることができる。

これは誰かに敗戦の責任を押しつけ、敗戦に巻き込まれた自分たちを正当化しようとする議論では、決してない。他人事として処理できる問題ではない。むしろ、ブーメランのようにすべてが自分自身に戻ってくる体の問題なのである。それは引き続き、次のように論じていることから明らかである。

意識すると否とに拘らず、日本精神を有し、そのうちに生きる国民全体は、この点に於いて深く自ら反省するとともに直接時局に関係して、精神的に自殺せざるを得なかつた人々に対しても、必ずしもただに之を非難して快しとせず、同情をよせねばならぬ。けだし大声叱咤して国論の方向を誤る結果を招いた彼等論者といへどもやはり一面的には日本精神を所有した、いはば可憐なる正直者とすべきだからである。

日本を敗戦に導いたのは「直接時局に関係し」た者であるけれども、日本精神を持つ者という点で、背負うべき責任は折半されるべきである。国民は深く自ら反省すべきであるし、時局関係者を非難して済ませるわけにはいかないというのである。敗戦直後であるにもかかわらず、村岡の眼差しは深い慈愛に満ちており、しかも透徹して事態を見極めている。それは思想史家として、また大学教員として時局イデオロギーの構成に加担した村岡の責任の取り方だったのである。

さて、村岡典嗣の講演からちようど二十日後のことである。矢内原忠雄は昭和二十年十月二日と三日の両日に、木曾福島国民学校において「日本精神への反省」と題する講演をおこなった。この原稿に基づいて同年十二月十日にまとめられ、別日におこなわれた「平和国家論」と併せて、翌年六月に岩波新書より『日本精神と平和国家』が刊行された。

矢内原は東京帝国大学卒の経済学者であったが、キリスト教徒として内村鑑三や新渡戸稲造に私淑し、新渡戸の『武道』を和訳したことも知られる。東京帝国大学教授であった昭和十二年に盧溝橋事件直後に「国家の理想」(『中央公論』)を発表し、その内容が日本の植民地政策に抵触するものであったことが学内で問題となり、同年十二月に教授辞任を余儀なくされた(注20)。

昭和二十年八月十五日に山中湖畔で終戦の詔勅を聞いた矢内原は、敗戦の現実を受け止め、平和国家の建設に向けて講演活動を始めた。十月二日三日の講演「日本精神への反省」はその第一歩であった。そして、矢内原が講演の中核に据えたのは、ほかならぬ本居宣長であった。その理由について、矢内原は次のように語っている。

宣長は職業は医者であり、学問は国学を致しましたが、その学問に対する熱心、殊に単なる机上の学問ではありませんで、日本の国を愛し、日本の民族精神の本質を顕揚するところの努力に於て彼は稀に見るところの学者である。凡ての偉大なる学者がさうであるやうに、彼も戦ひの人である。非常なる熱情を以て、彼の学び得ただけの学問を全部用ひ尽して、撥乱反正の精神を以て戦つた戦ひの器でありました。日本精神の勝れた点も亦その欠点も、即ち日本精神の一つの理想型を、我々は宣長の思想の中に見出す事が出来ると思ふのであります。(一 民族精神とは何か)

ここに矢内原が「日本精神」を論じる際に、特に宣長に照準を絞つて論じようとする理由が書かれている。すなわち、宣長は「日本精神」のシンボルであり、その理想型を見出しているのである。ただし、「戦ひの人」という比喩や「撥乱反正の精神を以て戦つた戦ひの器」という見立ては、この講演が敗戦直後のものであることを考慮すれば、妙に生々しく響くことは否定できない。実際のところ、矢内原が宣長を標的にして「日本精神」を批判したのは、「日本精神」が戦争を推進する原動力になったからであり、「戦ひの器」としての役割を果たしたからである。一度、敗戦を清算す

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

るためにはスケープゴートが必要だった。宣長に「日本精神」のすべてを背負わせて流すことによって、敗戦という過去を清算し、明るい未来を描くことができると考えたからである。

もちろん、矢内原は「日本精神」のすべてを否定するわけではない。むしろ、これからの日本にとって必要不可欠なからざるものであると考えていた。末尾に「六 日本精神を嗣ぐ者」という章を設けていることから明らかである。その中で、日本精神を継ぐにふさわしくないものとして、日本主義や儒教、仏教などを挙げて一刀両断に切り捨てる中で、武士道に言及している。

武士道であるか。私は敢て言ふ、武士道も今は死物同然だ。武士道は封建時代の華でありまして、日本の武士の生き方を明かにしました。けれども今日は武士道が復興すべき社会的地盤がありません。軍人の中には立派な人もありますけれども、一般的に見て今日の職業的軍人が武士道精神をもつて行動したとは言へず、又行動し得ると私は思はない。

ほんの数年前に新渡戸稲造『武士道』を和訳して戦時期のベストセラーになったが、敗戦はそのような志をも挫くものであったということであろう。矢内原は、それらにとってかわる者として「基督教」を挙げている。それは矢内原が終生持ち続けた信念でもあった。

さて、矢内原は「日本精神」を甦らせるために、そのまま延命させるのではなく、一度けじめをつけなければならぬと考えていた。次のように語る。

宣長や、その門下である平田篤胤や、又その弟子たちの思想が推進力となつて明治維新の仕事が成し遂げられました。それと共に今日に到るまで八十年間の文化の歴史、精神生活の歴史の骨組をなして来たものが所謂日本精神であります。その功罪共に宣長の思想の中から出てをるのであります、之を凡て総決算してしまつたのがこの度の

戦争と、その結果とである。かうして考へて見ると、私共が今この日本精神に就いての反省をするのに、実に適切な時期におかれてゐることを知るのであります。(四本居宣長批判)

ここには重大な認識が披露されている。「日本精神」の「功罪」とは何か。「日本精神」のすべては宣長を発祥とするものであり、明治維新という功績とそれ以後の八十年の罪過を生んだという認識である。そのような「日本精神」について、「之を凡て総決算してしまつたのがこの度の戦争と、その結果とである」と語っている。この言説は、前に見た村岡典嗣の講演を想起させる。「敗戦は思想的に日本精神の自殺である」という言説である。村岡と矢内原は学統も学問領域も異なり、思想的立場も接触しないが、敗戦という現実を前にして口にした言葉は、異口同音であつた。この奇妙な暗合はその後の「日本精神」のたどる道筋を示唆している。

敗戦を乗り越えるためには、「日本精神」を葬り去らなければならない。そう誓つた知識人は多かつたであろう。その際、本居宣長もまた「日本精神」の巻き添えを食つて、ダークサイドに落ちた。日本が昭和二十年八月十五日を経て直面した現実、敗戦という国家的敗北と、「日本精神」の放棄という思想的敗北であつたということができよう。

八、おわりに

満洲事変を契機に流行し、同時代イデオロギーとなつた「日本精神」は、さまざまに議論され、頻りに付会され、盛んに教育された。ところが、敗戦を経てその状況は一変した。手のひらを返したように、「日本精神」は戦犯扱いされた。それまで錦の御旗とされたものが敗走者の汚名を着せられたのである。

第四節で確認したように、教育関係の辞典に「日本精神」が立項され、解説されたが、それは戦後においても引き継がれる。ただし、その記述は戦前の辞書記述とは異なるものになつた。『教育学事典』第四卷(平凡社、昭和三十一年一月)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）

による「日本精神」は次の通りである。

江戸時代の「やまとごころ」明治時代の「大和魂」について、大正時代のなまごころから普及しはじめ、昭和年代に入って流行し、終戦までさかんに使われた言葉である。この言葉がなにを意味しているかはあまり明白でないが、安岡正篤によると「日本民族精神」と同義にもちいらられ、「三種の神器が実に善く日本民族の精神生活の綱領を表している。万有を包容せんとする仁と、其の無我より発して内外を照被する智と、之に伴ふ不断向上の勇、これぞ民族の三大達徳である。」といい、紀平正美は、「清明心即ち其の働きとしては直毘靈、これが何にくその力に日本の生活が組織せられて内容となつたものである。」と説いている。要するに、万世一系の天皇を奉戴する日本民族は、独得優秀な心理的素質と徳性とをそなえている、と確信する論者にもちいられてきた言葉といえる。（古川哲史）

「日本精神」の語誌を記述した後で、語義については意味不明であるとしている。そうして、安岡正篤『日本精神の研究』と紀平正美『日本精神』の言説を引用した上で、「日本精神」の用法をまとめて終えている。この辞書記述が戦前のそれと異なるのは、この用語に対する距離感である。それは三点に整理できる。第一には「終戦までさかんに使われた言葉である」という表現であり、辞書刊行（昭和三十一年）のリアルタイムには用いられていないことを示唆している。第二に意味不明瞭であることを記して憚らないことである。第三として、「と確信する論者に用いられてきた言葉といえる」という結びに明らかのように、「日本精神」が「万世一系の天皇を奉戴する日本民族は、独得優秀な心理的素質と徳性とをそなえている」という信念に支えられているという事実を冷淡に突き放している態度である。以上のことを総合すれば、「日本精神」は過ぎ去つた時代に盛んに論じられた概念であり、敗戦を境にして死語と化した用語ということになる。なお、文責の古川哲史は戦前に東京帝国大学で和辻哲郎に師事し、戦後には東京大学教授を務めた。

また、第五節で指摘したように、哲学辞典においては、発禁処分を受けた『現代哲学辞典』が戦後、復刊した。興味

深いことに、二種類の『現代哲学辞典』のうち、初版本の方が伏字をすべて取り外して復刻されたのである。復刻第一刷が発行された昭和二十二年四月といえば、GHQによる占領政策の一環として、戦時中に刊行された書籍の中から特定の書籍が没収され、焚書処分にする施策が本格化する時期である。つまり、戦時中に盛んに戦意を昂揚した図書はGHQによって焚書にされ、戦時中に発禁処分を食らった図書が復権したわけである。『現代哲学辞典』が昭和十六年刊の新版ではなく、昭和十一年刊の初版が復活したのは、戦後の思想制御の政策を考察する上で示唆に富むものと言つてよからう。

なお現在、日本語の辞書で「日本精神」を立項している辞書はない。たとえば、小学館『日本国語大辞典』は初版（第十五巻、昭和五十年）も第二版（第十巻、平成十四年）も、ともに「日本精神」を立項していない。古典語でもなく、現代語でもないという判断なのである。『国史大事典』（吉川弘文館、平成二年）が「日本精神」を立項し解説しているのは、現代の使用語彙ではなく、すでに歴史的な語彙となったことを意味している。

かくして、「日本精神」は戦時中の熱狂的な流行の後、敗戦を経て死語（廢語）となった。それとともに、敷島の歌もまた忘却の淵に沈んだのである。

注

(1) 昭和二十年十二月十五日発布の覚書「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」一の(又)参照。

(2) 日本精神論の発生と変容については、拙著『本居宣長の大東亜戦争』（ペリカン社、平成二十三年八月）第二章「同時代思想としての国学（下）―日本精神論の流行と変容―」に論述した。本稿第二節第三節は、便宜上内容的に旧稿と重なるところがあることをお断りしておく。また、拙著『国学史再考―のぞきからくり本居宣長』（新典社、平成二十四年一月）第十三章「太平洋戦争期の国学―日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって（その二）（田中）」

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐる―(その二)(田中)

敷島歌・日本精神・武士道(一九四一年)」は、同様の問題意識のもとに国学受容史の観点からとらえなおしたものである。

(3) 大久保利謙編『西周全集』第三卷(宗高書房、昭和四十一年十月)。なお、片仮名は平仮名に改めた。

(4) 桜井鷗村訳『武士道』(丁未出版社、明治四十一年三月)。

(5) 「河原操子」『改版日本の橋』(東京堂、昭和十四年九月) 参照。

(6) 朝日新聞昭和十九年十月二十九日朝刊一面。

(7) 『定本愛国百人一首解説』(日本文学報国会編、昭和十八年三月) 参照。

(8) 村岡典嗣『日本精神論』(『日本国家科学大系』第一卷、実業之日本社、昭和十八年五月) 参照。

(9) 子安宣邦『「大正」を読み直す』(幸徳・大杉・河上・津田、そして和辻・大川)』(藤原書店、平成二十八年) 参照。

(10) 本文は思想調査資料集成刊行会編『文部省思想局 思想調査資料集成』第十一卷(日本図書センター、昭和五十六年六月)を使用した。

(11) 報告書はこの実践的日本精神論について、「日本精神の中心眼目は結局この問題に帰着するのではあるまいか。而して国民の安んじて行じうるの境は、「詔を承けては必ず謹む」ところ、言ひ換へれば、大君のみことのまゝに随順するところにあるは申すまでもないことである」と結論づけている。

(12) 宮地正人「天皇制ファシズムとそのイデオログたち―「国民精神文化研究所」を例にとって」(『科学と思想』七十六号、平成二年四月)に推薦書に関する分析が備わる。

(13) 『現代哲学辞典』は再版が昭和二十二年四月に日本評論社より刊行されている。第八節参照。

(14) 前述の「ファシズム」が典型的であるが、伏字の基準にはばらつきがあり、不統一が散見される。

(15) 編集委員の一人でもあった権俊雄は後年、執筆者の変名や字句の訂正など、この辞書の編集にまつわる苦労話を記している。『歴史は繰り返すか―現代史エッセー』(勁草書房、昭和五十四年)所収「戦争とファシズム」参照。

(16) 戸坂潤の『新版』からの降板については、それが企画、編集されていた、ちょうどその頃(昭和十三年十一月より昭和十五年五月まで)、戸坂は「唯研事件」(「唯物論研究会関係者治安維持法違反被告事件」)により検挙され、杉並警察署の留置されていたこと

が主因であると思われる。

(17) 大塚奈奈絵「国立国会図書館蔵『発禁図書函号目録』―安寧ノ武・風俗ノ部」(『参考書誌研究』七十七号、平成二十八年三月)によれば、当該書は昭和十七年七月三十日付で「安寧ノ部」として受領されている。なお、権俊雄前掲書によれば、執筆者の変名や字句の訂正など、編集段階においても検閲との駆け引きがあったという。

(18) 得能文「現代中等修身教授必携」(東京開成館、昭和十年三月)第三卷第十九課「日本精神」参照。
(19) 論文末尾の付記による。

(20) 『東京帝国大学一覧 昭和十三年度』に「依願免本官」とある。

Japan's Defeat and the Theory of the Japanese Spirit

Koji Tanaka

Abstract

Japan accepted the Potsdam Declaration and was defeated in August 1945. The path that the country followed after defeat was a thorny one. As a defeated nation it had its sovereignty, land, and pride taken away by the victorious nations. In particular, having words taken away from it was deeply regretful. The language that was lost has never been recovered. Considering Japan's progress in the post-war period, this word-hunting worked like a body blow to the nation. In the Shinto Directive issued by the Supreme Commander of Allied Powers in 1945, only "Greater East Asia War" (*Daitō a sensō*) and bringing "the eight corners of the world under one roof" (*hakkōichiu*) were banned from official documents, but there were other words that were erased, and one of these was the "Japanese spirit" (*Nippon seishin*) .

The term "Japanese spirit" was born after several foreign wars, became popular after the Manchurian Incident in 1931, but disappeared when Japan was defeated. The term appeared in the Shōwa era (1926-1945) as a restatement of the "Yamato spirit" or "Yamato sentiment" from the end of the Tokugawa era (1603-1868) . One problem it encountered derived from a misinterpretation of a poem by Motoori Norinaga called "Shikishima no uta." The popularization of the "Japanese Spirit" cannot be discussed, though, without considering the influence of dictionaries and textbooks. Dictionaries were intended to convey cutting-edge research to a wide audience, and while it can be said that textbooks are not immediately impacted by academia and debates, during this period the influence from current affairs can still be seen reflected in them. Therefore, dictionaries

日本精神論の敗戦―宣長国学の表象をめぐって(その二)(田中)

and textbooks were affected by the atmosphere and were at the mercy of the times.

This essay aims to trace how the Japanese spirit was born, became popular and spread, and then suddenly disappeared.

Keywords : theory of the Japanese spirit, Japan's defeat, Motoori Norinaga, nativist studies, misinterpretations and distortions.